

学力向上をはかる学校組織の在り方：
高校教育改革の中で有効な学校改善に関する探究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 望月, ゆかり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007274

学力向上をはかる学校組織の在り方

—高校教育改革の中で有効な学校改善に関する探究—

望月 ゆかり

The State of School Systems Aimed at the Improvement of Academic Abilities :

A Study of Effective School Improvement in High School Education Reform

Yukari MOCHIZUKI

1 問題意識と目的

(1) 問題の所在

時代の変化に合わせ、全国的に高校教育の改革が行われている。各都道府県において高校の再編統合が進む中、高校の特色ある学校づくりが進展している。特色ある学校づくりの柱として、いかにして学力を向上させるかという根幹的な問題がある。単に「学力」と言ってもその捉え方は様々であり、高校ではペーパーテストで測定可能な「知識重視」型学力すなわち、大学入試に必要な学力重視で進んできた実情がある。地域や生徒の支持を得るためには進学実績が重要だからである。しかし、今後は、従来型の学力観だけで進んでいくわけにはいかない。高校教育は社会の本音として要求される大学進学実績の向上と、教育の本質としての PISA 型に代表される現代的学力の向上との間で揺れているというのが現状である。

(2) 研究の目的

高校にとって大学への進路実績を上げることは大きな課題の 1 つである。そのため、生徒の実態にあった効果的な指導法を明らかにしたいと考えている。そこで、生徒の学力を伸ばすと定評のある普通科 A 高校の実態を調査する。そこでの取組を調べながら、「知識重視」型学力向上の要因が何であるかを探り、生徒の実態にあった組織的取組の効果的な指導法とその要因を明らかにすることが、本研究の目的である。この研究により、A 高校における学力向上のための組織的に効果的な指導法とその要因が明らかになれば、中堅校における学習・進路指導法の 1 つの目安を作ることができる。

また、組織での活動の成否の要因は、戦略の優秀性よりもメンバーの納得性が大事であることから、納得性を高める 1 つの手立てとして、コーチングによる指導法を提案し、今後の学校組織におけるコーチングの有用性を考察する。さらに、もう一つの学力である「知識活用」型学力向上のための授業改善の必要性から、提案授業を実施する。この提案授業を授業改善のきっかけにしよう事を目的としている。

(3) 研究方法

まず、背景として全国の高校の再編動向や学力観の変遷について調べ、その中での A 高校の状況を観察する。その観察・調査結果を分析した上で、「知識重視」型学力向上の要因について作業仮説を立てる。それに基づき、A 高校教員や卒業生にインタビュー調査を行い、仮説の検証を行う。さらには、それが、一面的な意見でないことを確認するため、教員及び生徒への質問紙調査

を行い、主に統計的な方法で検証する。

また、A 高校の組織的な活動がより円滑に行われるようにするため、コーチングの導入を提案する。本研究では、コーチング研修会を 2 回実施し、教育現場におけるコーチングの有用性を考察する。さらに、もう一つの学力である「知識活用」型学力向上のきっかけとしては、A 高校 1、2 年生に対して、各 1 回ずつ数学科における提案授業を実施し、その有効性を検証する。

2 高等学校再編の動向

全国的な動向としては、中高一貫教育校や、総合学科、単位制高校などの設置が進んでいる。学科数についても変化が見られ、従来型の商業科・家庭科・農業科が減少し、新しく総合学科やその他の学科数が増えている。

静岡県では、「静岡県立高等学校第二次長期計画」が平成 27 年度を見通して策定され、生徒数の減少や、社会のニーズの変化を踏まえて、教育条件の整備確立に関する基本方向が述べられた。その計画の中に A 高校の再編整備の方向が位置づけられている。

A 高校は普通科・英語科を併設し、高校としては比較的小規模の学校である。昭和 54 年 12 月、県の第 2 次高校生急増対策「高校新設後期計画」により設置されることが決定され、昭和 56 年から教育活動が開始された。開校から 32 年たった今、少子化の影響で、再編整備の対象校となった。平成 24 年度をもってその歴史に幕を閉じることになっている。

3 我が国における学力観の変遷

学習指導要領の変遷から、日本の学力観の動向を簡単にまとめてみる。昭和 22 年に最初の学習指導要領が発行された。これにより、高等学校で行うべき学習内容が明確化された。昭和 45 年に高度経済成長を背景に知識重視の学習指導要領が作成され、偏差値による受験体制が激化していった。そして、この受験体制の激化を抑えるため、平成元年の学習指導要領の全面改訂で、いわゆる「ゆとり教育」がスタートした。この改訂から「知識重視」よりも「関心・意欲・態度」が大切だと理解されていくようになった。さらに、平成 10 年学習指導要領改訂のもととなった平成 8 年の中教審第 1 次答申にて、「生きる力」の育成が重要であることが述べられ、学力観が大きく変わってきている。

「ゆとり教育」が行われる中、平成 15 年に OECD が行った学習到達度調査（PISA 2003）の結果から日本の点数低下が問題となった。平成 18 年の同調査では、日本の点数低下がさらに問題となり、「ゆとり教育」の見直しが着手され始めた。そして、平成 20 年の学習指導要領の全部改正で、「ゆとり教育」は終焉を迎え、PISA 型に代表される「知識活用」型学力が重要視されるようになった。

4 A 高校を観察しての現状

A 高校に入学してからの生徒の学力向上は、ベネッセコーポレーションによるスタディーサポートの結果から明らかである。A 高校においては、学力向上のため、選抜クラスの設置、DOD 学習、終礼テスト、朝読書、英検取得指導などの多くの指導が行われていた。

A 高校の生徒はきちんと挨拶をし、服装の乱れもない。授業態度もまじめで、大人しく、素直

な印象を受ける。教員については、非常にきめ細かく熱心に生徒を指導している。学習指導だけではなく、生徒指導上の指導もきちんと行っている。多くの取組をしており、さらに、今年度はB高校との再編準備で多忙だと思われるが、疲弊感が感じられず、生き生きと活動している。

進学指導については、入学してくる生徒の学力層を考えると、推薦入試やAO入試を利用しての進学が多くなる学校がよく見られるが、そのような指導は行わず、一般入試受験での大学進学を目指している。

これらの観察をもとに、学力向上の要因を明らかにするための考察の視点となりうる以下の4つの作業仮説を立てた。これをもとに、さらにA高校の実態を分析する。

- ①生徒の中学生時代の様子と素直な気質が、教員の指導と適合し、生徒の学力向上につながっている。
- ②教員の指導が組織的にきめ細かいため、生徒の学力が向上している。
- ③目標設定を高くし、生徒が安きに流れないような指導が学力向上につながっている。
- ④組織がまとまっているため、生徒への指導が浸透し、学力向上につながっている。

5 A高校の現状分析

(1) インタビュー調査の分析

校長インタビュー調査からは、校長が教員を信頼し、職員の協働性の高さを評価していることがわかった。進路指導主事インタビュー調査からは、ミドルリーダーである進路指導主事が、ボトムアップを考え、周囲に配慮して、協働性を高める役割を果たしていることがわかる。目標を高く持たせる指導を行っていることもわかった。卒業生へのインタビュー調査からは、教員のきめ細い指導や、それに応える生徒の様子や、生徒の素直な気質も見られた。さらに伝統を重んじ、教員のみならず、先輩が後輩を育てていることもわかった。

(2) 教員の生徒・組織に対する意識

A高校教員に、生徒や自分たちの組織に対する意識を調査するため質問紙調査を行った。「教員の面倒見の良さ」と「A高校が好き」の評価が高い。その他、「生徒の素直さ」「職員の仲の良さ」についても比較的高評価である。しかし、「大学進学への勧め」や、「一般入試で受験することを勧める」という項目に関してはそれほど高くなく、教員全体が強く意識しているとは言えない。性別や立場の違いによる教員・生徒に対する意識も調べたが、若干の差があるのみであった。

(3) 生徒質問紙調査の分析

A高校全生徒を調査対象とし質問紙調査を行った。集計結果を見ると、素直で真面目な気質の生徒が多い。教員に対しての評価では、面倒見が良く、教科指導も進路指導にも熱心であると高く評価している。一方、授業に関する評価が比較的低い。

生徒質問紙調査に対して階層的クラスター分析を用いて調査を行った。その結果、中学校生活に満足し、自分を素直で従順だと自己評価している生徒や、教員の組織のまとまり・熱心な指導に対して高く評価している生徒、教員が目標を高く持つことや勉強の大切さを強く訴えていると

感じている生徒の方が、高校での成績が高いことがわかった。これらは、すべての仮説を裏付けるものである。

さらに、仮説③について確認するため、目標を高く持たせる指導と生徒の成績との関係を調べた。その結果、成績上位層の生徒には、この指導が効果的である傾向にあることがわかったが、成績下位層の生徒には、目標を高く持たせる指導は行き届きにくいことがわかった。そこで、成績下位層にはどのような指導が有効であるかを調査したところ、成績下位層の生徒たちは、他の層の生徒達と比較して、授業が楽しいと思っていないことがわかった。成績下位層にも、授業を楽しく感じるような内容や展開が必要である。

図1は、生徒がそれぞれの指導に対して、学力向上と学習習慣への有用感を5点満点で評価したものの平均点をグラフにしたものである。評価が最も高いのはDOD学習であった。DOD学習とは、体育館に机を並べて、一日中無言で学習するA高校独自の行事である。その他、終礼テスト、定期テストの評価も高い。テストに向けての学習が、学習習慣を生み出し、学力を養っているとと言える。最も評価が低いのは、宿題未提出の際の居残り指導の学力向上への評価であった。

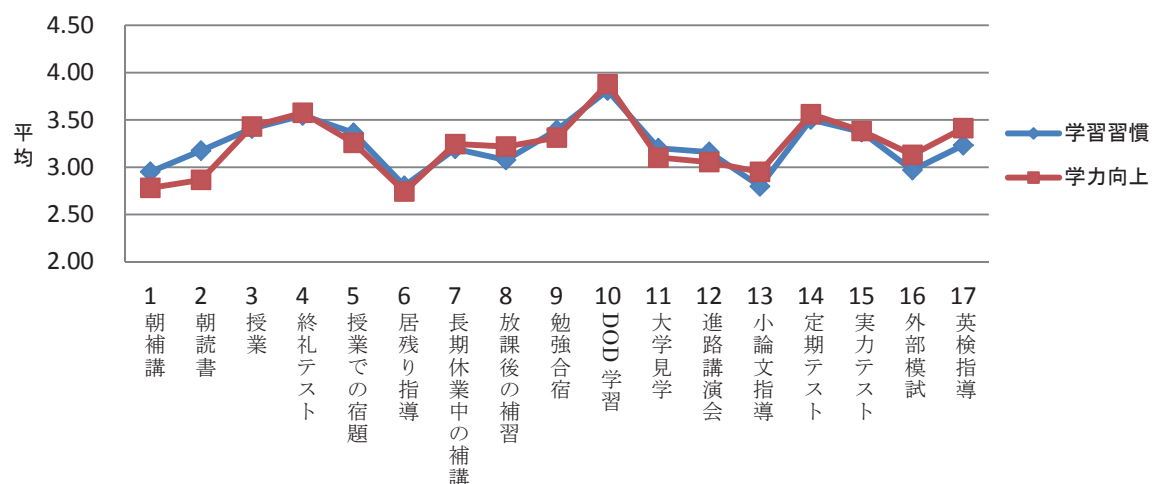


図1 学習習慣・学力向上に対する評価点の平均

男女別や、「大人しい」と「大人しくない」グループでの比較、「素直」と「素直でない」グループでの比較、運動部と文化部での比較も行った。これによると、女子や、大人しく素直な生徒、文化部の生徒がA高校の指導を高く評価していた。A高校には素直で真面目な生徒が多いため、A高校の指導は、生徒の気質に適合した指導であると言える。さらに、女子はコツコツ型指導を好み、男子は短期集中体験型指導を好むこともわかった。「大人しい」生徒や「素直」な生徒は、組織的体制的枠組みで学習することが、学習習慣や学力向上につながると考える傾向にあることもわかった。

さらに、重回帰分析を行って生徒の気質、教員の指導に対する評価等の他への影響力を調べた。影響関係を図示したものが図2である。「先生の言い付けは守る方だ」が学力向上への評価の総得点に影響を与えていることから、人の言うことに素直に従う気質が、学力向上への指導内容への評価に影響を与えているとわかる。生徒の気質と学習指導内容のマッチングが重要であると言える。また、授業の楽しさが、高校生活への満足度や学習習慣、学力向上への評価にも影響を与

えている。ここでもまた、「楽しい授業」の重要性が明らかになった。

以上により、すべての仮説が確認できた。組織力が生徒の学力向上に影響すること、楽しい授業が重要であることから、コーチング導入と、「知識活用」型授業を提案する。

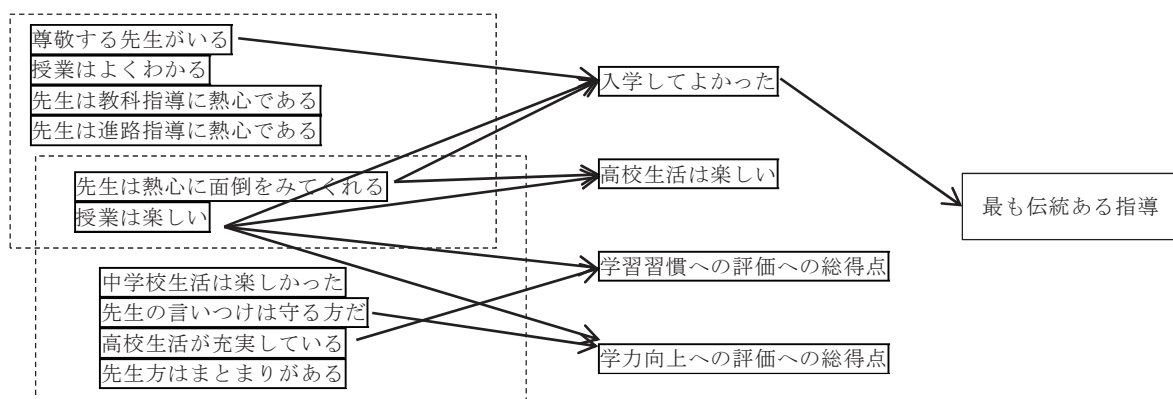


図2 生徒の気質・教員の指導に対する評価に関する影響関係図（有意差のあるもののみを有向線分で示した）

6 組織力向上のためのコーチング導入

本研究では、組織力が生徒の学力向上に影響することがわかったため、コーチングの導入を提案する。そこで、A 高校において、2 回にわたるコーチング研修会を実施し、教員の意識がどのように変化するかを調査した。2 回とも参加者の反応は好意的であった。2 回の研修を終えて、コーチングへの興味や有用感が高まった。さらに、組織に対する有用感と、生徒指導に対する有用感がともに強く、この2つが影響を与え合っていることがわかる。

以上から、今後のコーチング導入の可能性は高いことがわかる。組織として取り組まなくとも、教員一人一人がコーチングの考え方や、スキルを用いることは十分考えられる。

7 PISA 型学力向上を目的とした「知識活用」型授業の提案

ここまでの調査の結果、A 高校の課題として「楽しい授業」の必要性が上げられた。そこで、A 高校の学校改善の提案の1つとして、「楽しい授業」を行うための授業改善の組織的取組を提案した。「楽しい授業」とは「誰もが参加、発言でき、その教科の有用性を感じ、もっと知りたい、もっとやってみたいと感じる授業」であると考えている。そこで、「楽しい授業」の1つと考えられる、協調学習を取り入れた「知識活用」型授業の導入を提案している。A 高校の1年生と2年生に対してそれぞれ1回ずつ提案授業を行った。

2年生の授業では、離散数学の中核をなす1つであるグラフ理論につながる問題を取り扱った。数学の有用性に気付かせたいと考え、この教材を取り扱うことにした。ここでは、ルールに従って、オセロの駒を使いながら、○とーをつないで図形をつくるというパズル感覚でできる教材を作成した。この教材は、論理的な思考力を必要とし、事象の数学化も行う問題になっている。初めは各自で考え、その後グループ活動を行うという授業形態をとり、言語活動も活発化させた。

1年生の授業では、富士山と校舎を写真に撮った場合に、どちらが高く写るかという問題に挑戦させた。この問題は、現実的な問題場面をどのように数学化することができるのかにかかっている。この授業では、数学化に焦点をあてて教材を作成した。さらに、撮影位置を校舎からの距離

で3パターンに分けて設定し、初めはエキスパートグループで割り振られた距離で調べ、それをジグソーグループで説明するという授業展開で行った。

今回の2つの授業研究において、協調学習を取り入れた「知識活用」型授業は、多くの生徒が楽しいと感じることがわかった(図3)。さらに、数学の有用性を伝えるための教材として、生徒

が取り組みたくなるもの、身近な物と結びつくものなどが適切であることがわかった。そして、授業の中で、現実社会と数学をつなげる「数学化」を行う必要がある。授業方法については、グループ活動を導入し、協調学習の楽しさを伝えるべきである。

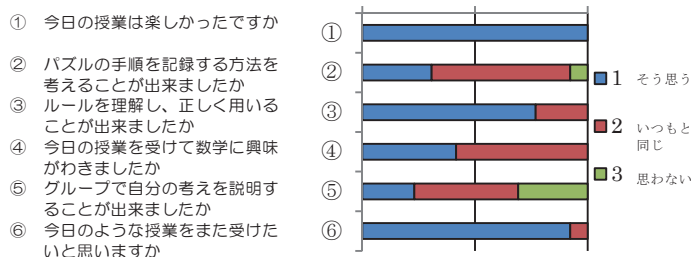


図3 2年生授業後のアンケート結果

8 本研究のまとめと提言

本研究の調査の結果、A高校の指導が、生徒の気質に適合した指導だとわかった。そして、生徒の気質に合った学習・進路指導計画が、生徒の学力向上にとって重要であることや、生徒の気質による好まれる指導法の違いについても明らかになった。さらに、教員のきめ細かい熱意ある指導が、生徒の学力向上を含めた高校生活全般に大きな影響を与え、組織のまとまりが、生徒への指導を浸透させ、学力向上につながっていることもわかった。よって、本研究では、コーチングの導入により、組織力を高めることを提案した。

2回にわたるコーチング研修会を実施した結果、学校組織へのコーチングの導入は、十分可能であるということが明らかになった。今後、管理職の教諭への指導、教員間でのメンタリング、会議や授業研究会でのファシリテーションへの応用も望まれる。

また、生徒への目標設定を高く持たせる指導は、成績上位層の生徒の学力向上に効果を与えることがわかった。その一方で、成績下位層の生徒に対しては「楽しい授業」を行うことが学力向上の鍵であることが明らかになった。そこで、「知識活用」型授業の提案を行った。

「知識活用」型学力向上のためには、教材に身近な物を取り入れ、現実社会と数学をつなげる「数学化」を行うとよい。授業方法については、グループ活動を導入し、協調学習の楽しさを伝える必要がある。このような方法を取り入れた授業を高校生は楽しいと感じていることから、さらなる学力向上のためには、協調学習を取り入れた「知識活用」型授業を行う必要があることが本研究で明らかになった。

以上の事から、学力向上をはかる学校組織には、

- ①生徒の気質を見極め、それに合った学習・進路指導計画を作成し、協働的に取り組む。
 - ②コーチングの導入により、納得性が高く、組織アイデンティティ即ち自己組織肯定感の強い組織を作ること多忙感を減らし、より多くのエネルギーを生徒に向けることを可能にする。
 - ③生徒の学力向上には「楽しい授業」が欠かせないことから、PISA型教材を用いたグループ学習を行い、「知識活用」型学力育成のための授業改善に努める。
- ことが必要であると言える。